# 中島飛行機の下請け工場になる

昭和十六年（一九四一）十二月八日、日本海軍のハワイ真珠湾攻撃によって太平洋戦争に突入した。太平洋戦争が始まり。当社は軍需の増産に追われ、ますます多忙になった。原料資材は軍から支給されるので、製造に専念していればよかったが、民需の補修用は生産割当が次第に狭められて窮屈になってきた。民需用は統制組合（日本自動車工業組合、商工省認可団体）に売り渡し、一般ユーザーへは配給であった。戦局が悪化してきた昭和十八年（一九四三）に入ると、軍需だけで手いっぱいになり、民需向けはストップになった。ところが、このころから当社をめぐる情勢に大きな変化が起こってきた。それは国をあげて飛行機の急増産に取り組み、飛行機製造が最優先されるようになったため、同じ軍需の指定工場であって、軍の証明をもらっても、飛行機でないと後回しにされたり、効力がなかった。当社も原料資材の面でそうした影響を受けだし、更には従業員が飛行機関連工場へ徴用されるようになった。

そこで石川勝四郎社長は、中島飛行機株式会社の下請工場になろうと決意し、当社から積極的に働きかけた。この結果、昭和十八年（一九四三）四月から同社の専属指定工場になった。当時中島飛行機は戦闘機製造のトップメーカーであった。これを機会に社名を「石川航空機工業株式会社」と改めた。さっそく、航空機エンジンのガスケット製造を始めた。製品すべてに精度が要求された。それは厳しいことであったが、当社の技術向上になった。